

はなりぬ。但だ予は予が今日の分として、この實驗の意義
價値の幾許なるかを料り知る能はざるのみ。真理の躰察、
豈容易ならんや。予は唯だ所謂悟後の修行に一念向上す
るあらんのみ。

嗚呼、予が見たる所、感じたる所、すべて是くの如し。或は
餘りに自己を説くに急なるふしもありしならん、或は辭藻
や、繁くして、意義明瞭ならざるふしもありしならん、いづ
れは予が筆の至らざる所と諒し給ふべし。予は今尙ほこ
の事の表現に心を碎きつゝある也。但だ予は此くの如く
に神を見、而してこれより延いて天地の間の何物を以てし
ても換へがたき光榮無上なる「吾れは神の子なり」てふ意識
の鬱として衷より湧き出づるを覺えたり。われは宇宙の

間に於けるわが眞地位を自覺しぬ。吾れは神にあらず、又
大自然の一波一浪たる人にもあらず、吾れは「神の子也」天地
人生の經營に與る神の子也。何等高貴なる自覺ぞ。この
一自覺の中に、救ひも、解脱も、光明も、平安も、活動も、乃至一切
人生的意義の總合あるにあらずや。嗚呼、吾れは神の子
也、神の子らしく、神の子として適はしく活きざるべから
ず。かくして新たな義務の天地のわが前に開けたるを
感じたり。されど願みれば、吾れ敗殘の生、枯槁の軀、一脚步
を屋外に移す能はざるの境に在りて、能く何をか爲さむ。
吾れ一たびはこの矛盾に泣きぬ。而してやがて「世にある
限り爾が最善を竭くすべし、神を見たるもの竟に死なずて
ふ強き心證の聲を聞きぬ。新たなる力は衷より充實し來

たりぬ。それ吾が見たる神は、常に吾れと偕に在まして、其の見えざるの手を常に打添へたまふにあらずや。

(明治三十八年五月)

安心立命の二法門

この一篇は、雜誌「新人」が、特に軍人の爲めに其の慰問號を發行したる折に寄せたるもの也。

安心立命の三昧地に入るに大凡そ二つの總門あり。一を「あきらめ門」といひ、二を「信賴門」といふ。尙ほ之れを細別すれば、幾多の表門おもてもん裏門うらもん拔門ひきもん勝手門かてもんなどいふもあるべしと雖も、古來凡そ安心立命を得たらんほどのものにして、此の二大法門の何れかを満心の自覺もて熱心に叩かざりしは無かるべし。かくて前の一門より入りたるものは即ち「あきらめ門」の勇者、凡神教的勇者也、後の一門より入りたるものは即ち「信賴門」の勇者、一神教的勇者也。

この二種の勇者は皆等しく崇び敬ふべし、いづれをか揚

げ、いづれをかおとさん。且つや人のこの二門の何れかに入らんとするに方たりて、其の趣向を決こむるものは、個人の性情也、傾向也、好尚也、人格也、事情也、境遇也、機會也。されば今必ず一の門を捨てて他の門より入れと強ふる譯にはゆかず、かゝる人生の一大事を決するに、口舌三昧を以てするも、竟に益なかるべし。

たゞ予輩一己の實驗を云はば、眞の光輝ある安心立命は、「あきらめ門」の勇者の上にあらずして、「信賴門」の勇者の上にある。予は曾て前の一門より入りて安心を求め、而して一たび之れを得たりと思へり、されど得たりと思へるは、竟に幻まぼろしに過ぎざりき。そは竟に吾が眞要求を充たすには足らざりき。缺然たる空虚の感は、やがて復び吾れに還りたり。

吾れは去つて第二門を叩きて、更に第二の安心を得たり、而して其は眞實まことの者なりき。そは吾れを心の底の底より潤ほし、温め、和げて、而かも向上の一路に鼓舞作興、息まざらしむる眞個まことの靈たまの力ちからなるを感じたり。人生の眞諦まことこゝに日の如く耀きて、充足、平安、光榮、祝福の感、また加ふるものなからんとす。感謝はわが日ごとかの糧かとなりぬ。

何が故に一門は吾が要求を容れて、他門は之れを容れざりし、吾が自覺の證する所、答ふる所は極めて簡明也。曰はく、一は消極的しょうきよくの安心あんしんにして、他は積極的きふきよくの安心あんしんなればなりと。「諦める」は消極的しょうきよくの安心あんしんにして、「信じ頼む」は積極的きふきよくの安心あんしん也。されど消極的しょうきよくといひ、積極的きふきよくといへるのみにては、意義極めて漠たるが故に、更にこの二語の意味を打開たいげんくに及びて、始め

て安心二門の價值、優劣に對する批判は分明すべし。暫く下に説く所を聽け。

「あきらめ門」の勇者は以爲へらく、人生は空の空也、衆生及び世界は夢の如く光景の如し、我の存在に執するも亦迷也。一切萬有を空と觀じ去り、一切諸縁を放下し去りて、涅槃寂靜、始めて期すべしと。彼等が安心の極意は、死也、虛無也、寂滅也。「大いなるかな死、君子息ひ、小人伏す」。彼等が安心は、墓の「彼方」にあらずして、墓そのものの中にあり。彼等は「生さんが爲めに死ぬる」にあらずして「死なんが爲めに死ぬる」なり。彼等の願ふ所は「死之生」にあらずして「死之死也、往いて反らざる大死也」。寂然として聲なき「絶對」そのものを一個の墳墓として永劫の大眠に入る、これを彼等の安心立命とす。

更に「あきらめ門」の他の勇者は觀ずらく、因果の法則は一切萬有を貫きて易はらず、何物か、何人か、この因果の大海の波間に浮び、漂ひ、流れざる。人とは何ぞ、我れとは何ぞ、唯だこの因果てふ無端の連鎖の一つの結び目にあらずや。因縁の所生に自性あるとなし、我あるとなし。一切は是れ前因と後果と偶々相依り相縁じて結び出だしたる幻しのみ。自力といひ、自由、意志といふ、畢竟空語のみ。雨に法あり、風に律あり、人に定業あり、人間とは所詮、語り且つ考ふる一個精妙の器械にあらずや、自動機にあらずや。我が履むべき道は、既に先天必至の約束として定まれり。好くも好かぬも、假す所なき宿命は、爾を曳き、ずりて其の到る所に到らざ

れば已まざるべし。されば人よ、あきら腕く勿れ、あせ焦躁る勿れ、何事も因果とあきらめて、一切私意を馳するなく、妄情を動かすなく、寂然として天地の大法に服従せよ。我等の安心法即ち是れなりと。

因りて觀れば、所謂「あきらめ門」の勇者の安心法、亦知るべきのみ。一は生死流轉リキョウの因果の絆ツナを斷ち去り、空くうじ了して、寂滅爲樂の涅槃に眠れといひ、印度哲學の一部、釋迦教の根本思想、觀など之れに當る他は一切の出來事を因果宿命の必至の大法の然らしむる所と觀じ、何事もその自然の成り行きに打任せて復た心を動かすこと勿れといふ、ストア思想の一面、列子、スピノーザの解脱觀等、この品彙に入るべし要するに、いづれも一種の消極的安心法なりといふべし。是くの如き消極的安心法は、果たして吾人の心に窮極の満

足を與へ得べき乎。予輩は今この安心法に少なくとも三個の不満足あるとを指摘すべし。第一この安心法の最も重きを措くものは知識也、其の意にいふ、さき諦めるといひ、悟るといふ、皆知識もしくは知慧の沙汰なり。吾人をして一切の痴妄顛倒ちまてんたうより脱離せしむるものは知見の光なり、知見是れ唯一眞實の物、他の意志感情の如きは吾人をして限りなき迷誤の巷に流轉せしむる無明に外ならずと。是くの如き知識偏重觀は果たして能く吾人人心の要求を捉らへ得たりといふを得べき乎。知識は重んずべし。されど予輩の人生觀、安心觀中に立つ知識の位置は、竟に第二義に墮ちざるを得ず。知識は究竟情意の奴婢也、この點今は詳論の邊なし。第二、一切を夢幻と悟りすてよといひ、何事も因果

と諦めよといふ、さりながら天地人生を唯だ夢幻しとのみ
 悟りすてんには、餘りに深き意義あり、一切を因果の偶然と
 のみ諦め去らんには、餘りに深き涙あり。理性や知識の自
 悟自照をのみ偏重して、吾れ能く一切を悟りぬ諦めぬとい
 ふ者は、未だ眞に悟りて悟りきられぬ、諦めて諦めかぬる、深
 き、心の底の要求を自覺せざる者なり。かくて彼等の
 或者は、われは顔に思ひあがりて、一切を瞰みおろす超人の威
 を示せど、彼等も亦人の子なり、時に自家心靈の要求に裏切
 りせられて、堪へがたき寂寞空虚の思ひに、我れ知らぬ涙の
 下ることありぬべし。天地人生は夢にあらず、幻しにあら
 ず、單なる因果の鏈くわんにもあらず、随つて彼等の如く冷かに悟
 りすて、諦め去るべきにあらず。如何に浮世うきよを夢と悟りす

つればとて、我等は尙ほ時に何の木の花とも知らぬ匂ひに
 だに心躍るにあらずや。言ふこと勿れ、これ一念の迷まよなり
 と。これを一念の迷なりとするも、我等はなほこの迷の迷
 を重ねて休まざる已みがたき至深の要求を有するにあら
 ずや。嗚呼誰れかこの深き神祕の扉とびらを開くものぞ。第三、
 「諦める」は敵に背むかを見せたる言葉なり、其の態度は、浮き足也、
 逃げ腰也。彼等、あきらめ門の勇者は、因果宿命てふ大敵の
 壓迫に堪へずして、其の鋒先とびさしを避けて消極的安心を買へる
 ものとやいはまし。所詮、宿命てふものは、彼等に取りては
 譯のわからぬ妖怪ばいもなり、そは竟に彼等と何の交渉か、はりなし。既
 に交渉なし、かるが故に彼等は如何に之れを駕御し、統率し
 て、其の人生觀、安心觀中の一位置、一要素に攝取すべきかを

知らざる也。是に於いてか、彼等は一切之れを空了斷離して涅槃寂靜の大死境に入るか、然らざれば其の無意義、不可解の跳梁に打任せて自らかゝる大世界の嵐を餘處に、一切の運命を無頓著に、唯だく深く自家主觀の一城に閉ぢ籠もるの外はなき也。見るべし、この一類の安心法は、餘りに世間外界と絶縁し過ぎたる、餘りに天地萬有と自己とを二つに割ち過ぎたる安心法たることを。一切萬有は彼等に取りては空華幻影なるか、然らざるまでも何の意味も價值もなき、随つて何の交渉もなき物質的機械法の流行に過ぎざるなり、一言すれば彼等の安心は、一切の内容を排除して成れる、謂はば空洞の如き墳墓を家とせる安心なり。嗚呼復た寂びしからずや。如是の安心法、果して吾人全人の要

求を満足せしむるを得る乎。聽けよ、彼等が空視し、回避し、排斥せる一切萬有は、さしも冷やかに抛ち去られたる既失の正當なる權利を取り還さんとて、彼等が胸臆の底より一種堂々たる權威をもて叫びつゝあるを。彼等はこの權威ある聲を聞かざる乎、若しくは強ひてこの聲に耳を塞ぎたる乎、いづれにもせよ、かくして彼等「あきらめ門」の勇者は、概ね墳墓若しくは淋びしき野中の三昧堂に、究竟の安心なき安心の隱家を見出だせるなり。

去つて「信賴門」の勇者を見よ、彼等の安心は寂びしからず、冷やかならず、枯槁ならず、消極的ならず、歸依信樂の融々たる情調、不斷に其の心の底に深く充ち満ちて、自彊不息の健闘的精神、常に其の表に湧く。彼等は己れを擧げて大靈の

意志に信賴す、其の信賴や絶對的也、故に一切に意味あり、目的あり、鑑照あり、攝理あり。如何なる不幸災禍の中にありても、彼等は尙ほ感謝し、讚美するなり、彼等は冷やかなる運命の鞭にだに、尙ほ涙に餘る深き慈愛の意を繋けて、其の矢面より遁げず、隠れず、大膽に之れに面接して、之れに打ち克ち、之れを我がものとし、かくして之れをわが人格の發展、理想の實現の具とはするなり。彼等はせむかたなさに、絶望的に諦めるにあらず、喜び望んで、どこまでも信賴するなり、彼等は爲むかたつくれども望を失はず。彼等は神に屬する必勝軍の勇士也。

信じ賴むは即て愛する也。愛なければ信賴なく、信賴なければ愛なし。人、天地の大靈を信愛して、相交はり、相抱く、

而してこの靈交の意識の中より、蔚として湧きいづるものは、吾れは神之子なりてふ意識也。(この一意識に到達するまでには、何人も幾多の煩悶苦惱の經驗なきを得ざるべし。意ふに、世に此の神之子てふ一意識ほど、人をして自己の尊嚴と謙遜とを最も正當に自覺せしむるはあらず。かの自己を神と同じ位置に引き上げて、寂然として一切空と觀ずる知力的超人の自大矜高而かも中に墳墓の如き空虚の感を孕めるや、又かの自己を「自然」と同じ位置に引き下げて、「我」を因縁假現の一砂一塵とし、「同じ世界に湧いた蟲」と觀ずる、謙抑自小や、共に吾人、人類の天地の間に於ける眞地位を自覺したるものと謂ふ可らず。「神之子」の自覺者は之れと異なり、彼等は一而、天地の神を父と呼ぶの光榮無上の權威に

立つと共に、他面には謙々として其の聖意を奉じ、其の經綸に與り、天の父の完きが如く完くならんとを勉めて息まず。彼等は常に、深く神の懷ろなごみに在るの大平和、大安心に優游すると共に、一方には理想の神之國を此の下土現實に施しかんとして、不斷に向上し、自彊す。一切は彼等にありては、夢ならず、無意義ならず、萬有も自己も所詮は皆神性實現の一股節、一機關たるなり。かくして一切萬有は、彼等が安心觀、解脫觀の中に、皆それ〴〵の光榮ある位置及び價値を有し來たる。「信賴門」の勇者の偉大は、「神之子」の眞自覺を有する所にあり。

「信賴門」の勇者にも、時に涙あり、悲哀あり、苦悶あり。これ實に人生の事實也。彼等はこの事實を夢まぼろしと掃ひ

去らず、事實はどこまでも事實として、正直に大膽に之れに面して、回避せず、眼を蔽はず、而かも又之れを盲目無意義の宿命の跋扈と觀じて白眼に諦め去らず、神を信ずるの信もて喜んで之れを受け、進んで之れに打ち克ち、以て之れを神意實現の樂籠中のものとはするなり。かくてぞ我等が荆棘ちからぐさまげき人生の行路にを〴〵涙もなか〴〵に慰藉ちからぐさの力草なりける。信ずる者の涙は淋びしからず、涙そのものが彼等の喜びを深うするなり。古聖は、敵に石にて打ち殺さるゝ刹那、その顔貌かほ、天の使の如く輝きぬといへり。

萬里征戰の最愛の一人子ひとりごの身の上如何にと、明け暮れ氣づかふや、るせなき、老翁媪の愛思は、果たして夢乎、否、夢にあらず事實也。彼等若し、其の一人子の竟に敵彈に斃れたるを

聞かば、何事も我が世果敢なき宿命の約束と諦めん乎、但しは祖國人道の爲めに神の劔を把つて光榮ある戰場に斃れたるわが子の武運拙からざるを觀じて斷腸の涙ながらに感謝信樂の一念を神に捧げんか、前者偉也、後者は更に偉也、我れ今彈丸雨飛の間に立てり、是れ夢乎、否、夢にあらず、事實也、抑々我れとは何ぞ、我れは如何にか成り行くべき、吾が窮極の歸趣、落ちつきどころは何處ぞ、如是の一念一たび發し來たらんか、安心問題の解釋は、佛者の所謂頭燃を拂ふの急なるよりも急なる也、是に至りて諸君は謂ふ所二法門の何れを擇んで、この人生の一大事を決定せんとはするぞ。

「あきらめ門」の勇者の偉大は、神なく、神之子の自覺なく、且つ萬有を抛ち棄てたる偉大也、「信賴門」の勇者の偉大は、神を見、神と和らぎ、神之子の自覺を有し、且つ一切萬有を合はせ攝めたる偉大也。後者はそのいと微小き者だに、尙ほ前者の最も偉なる者よりも偉也。さらば如何。吾等如何にすれば眞に神を見、神之子の自覺を有する、「信賴門」の勇者たるを得べき乎、是れ容易の談にあらず。予輩は先づ諸君に向かつて、世界が曾て産したる最も偉大なる「信賴門」の勇者、耶蘇基督を研究し、其の人格に親炙せんとを望む。是れ眞個の安心門に入る最も確實なる第一歩也。

明治三十八年七月

神火と人火

古人は宇宙の眞實在を火なりと見て、火を以て萬有の變化成壞の一切を説き明かさんとしぬ。げに火の物たるや、我等人間界に於いて、偉大なるもの、神聖なるもの、權威あるもの、不可思議なるもの、流動無礙なるもの尤なり。此の物を以て萬有の眞實在と觀ずるは、決して意義無きとにあらず。天地の實在を理性なり、概念なり、若しくは意志なりと謂ふか、是れはた一種人的比論の語にあらずや、假りの符號の名目にあらずや。今火てふ語を以て、理性もしくは意志の語に代へ用ふるも、必ずしも失當にあらざるべし。

人この宇宙の火を稟けて生まる、生まれながらにして黯

然、靈光四發の徳を具ふ。その人生に發いて、隳ろに匂ふものは詩也、明かに沈むものは哲學也、生きて燃ゆるものは宗教也。徳教の火は堅くして凝滯し、人情の火は軟かにして流蕩す。戀人の胸には花暖かなる思を織り、預言者の舌には雷火礮く聲と熱す。カーライルの火は、勢ひ猛なる炎々たる山洞を噴き、エマルソンの火は、志らべ静かなる沈々たる明湖を湛へたり。勁くして温かなるは耶蘇基督の火、寂にして照らすは釋迦牟尼の火也。

人に主義あるべく、主義に火あるべし。而して主義の火は熱烈なるべし、熱烈ならざるべからず。熱火を包まざる主義といふが如きは、自ら欺き、人を誑く空名のみ。世には立派なる主義を標榜しながら、何等熱烈の火を藏せざるも

のあり、彼等に火なきにあらず、たゞ其は微温的なるなり。それ熱するにもあらず、冷やかなるにもあらざる主義態度、信念の、人に於いて最も忌むべき排すべきものたるは、聖經記者もしくは『基督之模倣』の著者等の言説を俟つて後知らざるなり。人主義なかるべからず、主義に火なかるべからず、而して主義の火は熱烈ならざるべからず、人と主義とを結びて一體たらしむるものは、如是熱烈の火にあらずや。如是熱烈の火ありて、人は主義に活き、主義は人に活く、かくして醇乎として光輝ある人格の火なるもの打成せらるゝなり。人格之火は微温にあらず、Lukewarmにあらず、軽く颯りて軽く降り、忽ち燃えて忽ち消ゆる輕薄浮泛の蕪火にあらず、海妖の點すてふ偽りの火にあらず。そは操持と之實

とを以てのが生命と燃ゆる不斷の白熾なり、Realなり、堅く充實せる火なり。是くの如き火は、堅實にして而かも流動無礙に、熾烈にして而かも一往超脱の冷味を湛ふ。太冷の中に太熱を包みたるは老莊の人格なり、太熱の中に太冷を藏したるは釋迦、基督の人格也。前者に於いて、超空の見識に人生不盡の涙を見るべく、後者に於いて、熱意の慈眼に無礙融會の活機を見るべし。極冷と極熱とを、高く深く總合したるものは、偉いなる人格の火也。

熾んなるかな天地の火。天地の火は、極冷と極熱と、至極の堅實と至極の流動とを一にして、見よ、永劫の雷と鳴りと、ろく焰の大海の表てに、萬類を涵すの靜影を浮かべ、大空高く萬道の火柱と聳え立つ山洞の傍らに、花草匂ひ、禽鳥和

鳴する息ひの緑野を展べ開く。天地の火は力の火也、智の火也、力と智とを打つて一つ心の誠に燃ゆる者を即て愛の火なる。げに愛こそは、いとも靈しき神々しき生命の火にはありけれ。それ愛は、唯だ盲目的に熱く燃ゆる活力の火にあらず、又唯だ寂然として黙照する冷かなる智見の火にもあらず。智と力と相抱きて、力を以て内より智を押し進め衝き動かし、智を以て外より力を燭らし導きて、其の合理的の目的を獲しむる者、是れ即て愛の本質にはあらずや。蛇の智慧と、獅子の威力と、加ふるに鳩の溫和とを以てせる大いなる人格の面影は、天地の大愛に見るとを得べし。天地の實相は永遠より永遠に燃ゆる愛の火也。愛之火の一語、世にこれよりも豊富に活潑に、天地の人格を形容する言葉

あるべしや。吾人の人格の最高の動機、至深の内容は、天地の大愛より掘み來たる不盡の火ならざるべからず。神火は人火の父也、理想也、極致也。

(明治三十八年七月)

應心録

〔自己の實在、自己と神〕

世に「自己を知る」てふことほど難きはあらず、吾人は果たして能く「自己」を知るとを得べき乎、「自己」の一部は之れを知るを得む、果たして「自己」の全體を知るとを得べき乎。姑く心理的現象につきて見るに、吾人が通常「自己」として知るものは、知らるゝ「自己」、所覺の「自己」、自覺の對境として客觀に置かるゝ「自己」、意識の光もて照らさるゝ謂ふところ、識閥上の「自己」のみ。知る「自己」、能覺の「自己」、自覺の對境としての「自己」を客觀に投置して之れを自覺する自己、Self-distinguishing Subject, Self-conscious Subject. としての「自己」、意識の光圏中に

立つ自己を打眺むる「自己」、この一面の「自己」は竟に吾人の知る能はざるものに屬せり。吾人の知る「自己」は、知らるゝ「自己」のみ。之れを知る「自己」、そのものは、到底吾人知識の把握以上にある。吾人若し能知の「自己」を拉し來たつて、之れを意識光中に立たしめんとせんか、其は忽ち一步を退きて暗中に没し去るべし。再び意識の光をさし向けて其の蹤を趁はむか、彼れは更に意識の光の達せざる暗中に奥深く退き隠るべし。かくして如何に追蹤しゆくも、竟に窮已ある可らず、能知能覺の「自己」は、いつまでも依然として意識の背後に立ちて其の正躰を現すとあるまじき也。されば吾人が「自己」につきて知る所は、畢竟所知の「自己」のみ、能知の「自己」は究竟不可知也、超意識也、超現象也。

能知能覺の「自己」は、覺に知るべからざる乎。然り知るといふと、若し意識の對象として觀ぜらるゝの意ならば、それは到底不可知也、不可見也。おのが顔は鏡に寫して見るとを得べし。されど吾人の「自己」は其の思ふ思ひを意識の鏡に寫し出づるに止まりて、思ひを思ふみづからの眞姿そのものは、永へに之れを隠して現はさず、吾人の見る所は唯だ様々の思ひの彩絲の意識の機杼に織り出ださるゝ現象的「自己」のみ、その之れを織り出づる主の「自己」當躰は、覺に永劫無色、不可見の手たる也。哲學者或は以爲へらく、眞に實在する者は唯だ現象的「自己」のみ、實躰若しくは本躰としての「自己」てふ如き者は無實在の空名に過ぎずと。されば或者は以爲へらく、吾人が「自己」と稱するものは、諸々の想念感情等

の不斷の起伏連續の流れ、そのものの謂ひにして、かゝる現象的意識の流れを外にして、復た本躰としての「自己」てふ如きものあるにあらずと（ヒューム一派）。又或者は以爲へらく、「自己」といひ「我」といふ如き觀念は、嚴正に論ずれば、究竟文法學上主部と述部とを別かつ場合の主部、若しくは論理學上、主語と客語とを別かつ場合の主語の如く、思想の構成上、假りに作り設けたる形式的名目に外ならず、吾等は「論理我」「文法我」あるを知る、覺に「本躰我」なるものあるを知らずと（カント）。（佛敎の根本思想も亦「自己」「我」てふものを因縁假現の偶然的現象と見て、其の常恒實有の性を否むなり。）果たして「自己」てふものの自性はなき乎、本躰はなき乎、「自己」は想念若しくは感情の流れの和とのみ見るべき純現象的のものな

る乎、單なる形式的「文法我」「論理我」としての外に、何等の實在性を有せざるものなる乎。吾人は今讀者を誘うて、この心理學上、哲學上精論を要すべき問題に踏み入るの違なし。但だ吾人をして簡短に此の問題に對する解釋の要諦を述べしめん乎、吾人は以爲へらく、「自己」を以て單に意識現象の流れに過ぎずとし、若しくは所謂能知能覺の「自己」を以て單に形式上、便宜上の名目に過ぎずとする如きは、會々心理的事實の省察に疎なるを示すものに外ならずと。單に意識現象を斥すものとしての「自己」以外に、復た「自己」の實在を認めざるものは、個々の意識現象を離合し、統一し、抽象し、區別し、評價し、撰擇し、決定するものあるの事實を何とか觀ずる。若し答ふるものありて、意識現象の離合はあり、統一はあり、

乃至區別、評價、決定はあり、而かも之れを離合するもの、「統一するもの」、「區別するもの」、「評價するもの」、「決定するもの」てふ如き「自己」そのものは、竟に無きにあらずや、如是のもの、畢竟空名の形而上學的怪物に過ぎざるに非ずやと謂はん乎。果たして然る乎、吾人は以爲へらく、離合に即して、離合者あり、統一に即して、統一者あり、區別に即して、區別者あり、評價に即して、評價者ありと。吾人はこゝに特に即してといふ、是くの如き一種の實在が、一切諸念の現象的作用を離れて獨在するものならざるは言ふまでもなく、其は一切諸念に内在し、一切諸念を通して、自己を語り顯はしつゝある也。而かも此等個々諸念の和は、以て到底個の一種の實在の意義を盡くすに足らず、其は一切諸念を離れてはあらずと雖も、

而かも亦一切諸念の上に超在して其を統一し、融會し、組織し、評價撰擇する一個活潑々地の力なり、靈能也。一切の意識現象をして、不可分、不可割の透明性を著けしむるものは、即て此の一種の力、一種の靈能にあらずや。而して是くの如き力若しくは靈能を指して「自我」と言ふが何故に非なる乎。ヒューム又はカント等の意若し現象としての意識内容を離れて獨在する本體的自我の非實在を主張するにあらば、吾人も亦見を同じうすべし。彼等の意若し然らずして、意識内容に即して、其の不可知、不可見の力を不斷に實現しつゝある一種の靈能としての「自我」其者をも非實在とするにあらんか、是れ畢竟彼等が公平に心的事實を内省せざるの過誤に坐す。人誰れか是くの如き意味にての「自我」の

力を感ぜざる。この意味に於ける「自我」亦一面現象としての意識を越するところあり、そは到底意識の對象としては知るべからず、見るべからず、則ち知るべからず、見るべからずといへども、誰れか其の一種の力としての實在性を否むべき。吾人は經驗上不斷に個々の意識内容を通じて、この一種の力又靈能の實在に觸れ、その權威を感じ、其の感化を受けつゝあるにあらずや。而して是くの如き靈能こそ取りも直さず吾人の所謂「自己」に外ならずとせば、「自己」や畢竟空名ならず。かの意識の單なる現象的連續としての自己や、形式上の名目たる論理的自我や、乃至は前因後果の假りに縁じ出だしたる無自性の自我や、是くの如き一類の概念は、以て究竟吾人の所謂「自己」を説盡するに足らざるなり。

吾人の所謂「自己」は、實に一切の意識に内在すると共に、それ以上若しくは以奥に一種常恒の自性を保てる儼然たる組織的、統一的實在者たる也。隨うて又この意味に於いて「自己」の本體を語るは、決して謬妄獨斷の沙汰なりと言ふ可らず。この意味に於いての「自己」の本體は、不斷に自家の活力を發現しつゝある眞實有也、否む可らず、空すべからず。かのデカルトの有名なる「我れ考ふ」又は「意識す」故に「我れ在り」の一立言の如きも、後起哲學者の種々の批評ありしにかゝらず、そは畢竟彼れが意識現象に内在し、且つ超在せる力の當體たる「自我」そのものの實在を直觀したる眞實語に外ならざるにあらずや。

是くの如き超現象の「自己」は、究竟すれば現今の心理學者

等の所謂「第二意識」そのものと落ち合ふべきものなる乎、或は又ハルトマン等の所謂「無意識」に歸入せしむべきものなる乎、今は一切これらの點に論著する餘地なし。但だ思ふ、人一たびこの超越的「自己」の自覺に心躍らんか、彼れは復び曠昔の地を匍ふ人にあらずして、時に潮なす高き天地の法音に偽りならぬ心耳を傾くるの人たるべきを。

意識はわれ一人の有ならず、意識は天上の星と繁く、全人類に華さく事實なり。星の參昂相隔ててものく天の一派に輝き麗くが如く、意識も亦雲山相間ててものく地の一角に索居することあり。星は天に於いて最も靈にして明かなる者也、意識は地に於いて最も靈にして明かなる者也。星は天上の意識也、意識は地上の星也。星が静夜の空

に語り合ふ秘密の言葉は、詩人ならでは聴くと能はざれど、意識が自他相神交し感應する事實に至りては、何人か皆自ら之れを経験せざる。げにや我等が神祕に驚き異しむ靈耳心眼の淺ましようも塞がり鈍りたればこそ自らも氣づかてあれ、若し一たびこの意識と意識との感應てふ一事實に冥想し到らんもの、誰れかは世にもかばかり深き秘密はあらじと感ぜざる。古人曰はく、無脚而走者感應也と。意識の感應は時空を超越す。意識の動くや、風を藉らず、光を藉らず、磁氣電氣を藉らず。唯だ靈のみ能く靈を知る。意識を知るものは意識自ら也。二個の意識の相求め慕ひ、結ばんとするや、天地萬有は透明の大海となる。一物の能く來たつて其の無礙の意を問つるなし。而して是くの如き驚

くべき意識の融會性、感應性は、是れ輒ち我等一切の意識が大いなる同じ意識の根柢に華さく事實を語るものにあらざる乎。一派の哲學者が、個人意識の底に、そを成り立たしむる要件として、普遍意識の深根の存在を説けるは、取りも直さずこの眞理を學理的に透發したるものといふべき也。吾人の「自己」には「自己」みづからの擅まゝに左右する能はざる客觀的權威の儼存するを見る、眞善美の觀念、是れなり。吾人は管だに能知者、能覺者たる超現象的自己を有する邊に自己の尊嚴と權威とを感ずるのみならず、又眞善美てふ標準的觀念を有する邊に自己の尊嚴と權威とを感ずる也。自己は眞善美を造る能はず、自己そのもの却つて眞善美に依りて姿高く打ち成さるゝなり。然らば眞善美の故郷は

何處ぞ。是くの如き思想の一路を辿りて、吾人の「自己」は又
 ちのづから天地の大源に入る。

自己より神に之く方法及び徑路は思ふに萬殊なるべし、
 以上は唯だ其のうちの確實なる一二を指斥したるに過ぎ
 ず。譬ふれば神は猶ほ、自己てふ峯巒の中に、深く神秘なる
 意識の鏡を打ち開きたる湖みづうみの如き乎、いづれの山道に傍う
 て降るも、迢り深きものは、竟に伴の神秘なる湖畔に到り著
 かでは已まざるべし。自觀は見神の最良最確の法也。人
 動もすれば事業ことわざまげき都會に神を見ずして、靜かなる田舎
 の景色に神を見るとぞいふ。さはれ事實はむしろ、吾人が
 徑ちに「自然」そのものの中に神を見るにあらずして、かへり
 て「自然」によりて淨化せられたる「自己」の眞面目に神を見る

にはあらざる乎。自己より神に之くその刹那觸發の意識
 には、思ふに一種隱微ひそかの消息あり、語る能はず、描く能はず。
 げにや掬くばば落ちぬべき淡くほのかなる姿して、而かもこ
 れに參するものをして一期の大歡喜に心躍た禁へざらしむ
 るこの意識ぞ、唯だ實參實得の人とのみ語り味ふべき。さ
 れば心詢に神を見んとするものは、吾人上陳の方法を辿り
 て自觀の工夫に深潜せよ。新たなる直覺の眼は、内よりお
 のづから開け來たらむ。佐藤一齋も亦親切なる自觀に依
 りて洞然として、醒睡ひびに問てられざる「常靈常覺」の「眞我」を直
 觀し得たりき。

(明治三十八年八月)

病問錄終

正誤

頁	行	誤	正
二〇	九	智識	知識
一〇	六	加被するといふ	加被すといふ
一三	八	理性	理性
全	六	推論的理的	推論的理性
三一	六	已まざらん	已まざらん
三五	六	如何なれば	如何なれば
六七	柱	若痛	苦痛
七三	四	去り	さり
七四	二	上し	上せ
一四三	三	精神的の方面	精神的の方面
一四七	三	欲嘆	歎羨
一六七	二	天地無窮	天地無窮
二一六	五	自家實現	自家實現

頁	行	誤	正
二六〇	四	力	力
二七七	五	寫象する	寫象せる
二八七	三	模倣	模倣
二九三	四	聲寂	聲寂
三〇五	二	模倣	模倣
三二一	六・七	鯨帖と大椿と	大椿と鯨帖と
三三六	八	句はせ	句はし
三四〇	註	妨礙	妨礙
三四五	九	類	類
三六〇	六	ニコラス	ニコラス
全	一	鐘めん	鐘めん
三九五	四	知慧	智慧

15/4/40

明治三十八年九月五日印刷
明治三十八年拾月老日發行



著者

網島榮一郎

發行者

金尾種次郎

印刷者

佐久間衡治

印刷所

英會

東京市神田區西今川町二番地

發兌元

金尾文淵堂

病問錄奥附

金壹圓

關東發賣元

東京市神田區表神保町

東京堂書店

東京市神田區裏神保町

上田屋書店

東京市京橋區尾張町

東海堂書店

東京市日本橋區箱屋町

前川文榮閣

大坂市東區南本町坐摩前南入

杉本書店

關西發賣元

久留米市米屋町

菊竹金文堂

九州發賣元

名古屋市宮町一丁目

星野文星堂

中京發賣元

《松本製本》

明治三十八年九月改正

東京

金尾文淵堂書店

藏版圖書一覽

類書說小版藏堂淵文尾金

須藤南翠	同	同	中村春雨	同	同	同	菊池幽芳
間	雛	無	密	秘	七	同	妙
一		花	航	中	日		な
髮	鳩	果	婦	秘	間		男
(新刊)	(再版)	(十版)	(新刊)	(二冊)	(再版)	(新刊)	(再版)
金七十錢 郵税八錢	金四十五錢 郵税八錢	金七十錢 郵税八錢	金七十錢 郵税八錢	近刊	近刊	金六十錢 郵税八錢	金六十錢 郵税八錢

類書說小版藏堂淵文尾金

				巖谷小波	佐野天聲	大倉桃郎
				喜	花	琵琶
				劇		
				七	輪	歌
				艸		
				(新刊)	(新刊)	(三版)
				金七十錢 郵税八錢	金六十錢 郵税八錢	金六十錢 郵税八錢

類書歌詩版藏堂淵文尾金

薄田泣菫 暮 笛 集 (三) 版 金六十錢 郵税八錢

同 行 春 (五) 版 金四十錢 郵税六錢

同 白 玉 姫 (新) 刊 金八十錢 郵税八錢

河井醉茗 塔 影 (新) 刊 金四十五錢 郵税六錢

オーキンミラ 野口米次郎 劍と戀の日本 (既) 刊 金四十錢 郵税四錢

與謝野晶子 み た れ 髮 (四) 版 金卅五錢 郵税四錢

同 小 扇 (再) 版 金卅五錢 郵税四錢

增田雅子 戀 衣 (三) 版 金四十錢 郵税四錢

類書歌詩版藏堂淵文尾金

與謝野鐵幹 毒 草 (三) 版 上製金七十錢 並製金五十錢

與謝野鐵幹 む ら さ き (四) 版 金卅五錢 郵税六錢

類書葉繪版藏堂淵文尾金

梶田半古 繪葉書源氏物語 (五十枚) 金五拾錢 郵稅貳拾錢

同 短歌繪葉書 (六枚) 石版 金參拾錢 郵稅貳錢

鏑木清方 夏すがた (六枚) 石版 金參拾錢 郵稅貳錢

岡吉枝 花の精 (六枚) 木版 金卅五錢 郵稅貳錢

和島田武英 小藤萬吾 思出草 (六枚) 木版 金五拾錢 郵稅貳錢

新海竹太郎 繪葉書十貳文豪 (二枚) 既刊 上製廿錢 並製五錢 宛

和田英村 島崎藤村 そのおもかけ (六枚) 木版 金五拾錢 郵稅貳錢

滿谷國四郎 薄田泣菫 ものおもひ (六枚) 木版 金五拾錢 郵稅貳錢

類書葉繪版藏堂淵文尾金

土井晚翠 親身詠繪葉書 (六枚) 近刊 金五拾錢 郵稅貳錢

中村不折 蕪村發句繪葉書 (六枚) 近刊 金五拾錢 郵稅貳錢

同 子規俳句繪葉書 (六枚) 近刊 金五拾錢 郵稅貳錢

同 俳諧繪葉書 (六枚) 近刊 金五拾錢 郵稅貳錢

26D40

金尾文淵堂藏版筆蹟畫集類

子規自筆 俳人芭蕉 (木版) 金五十錢 郵稅四錢

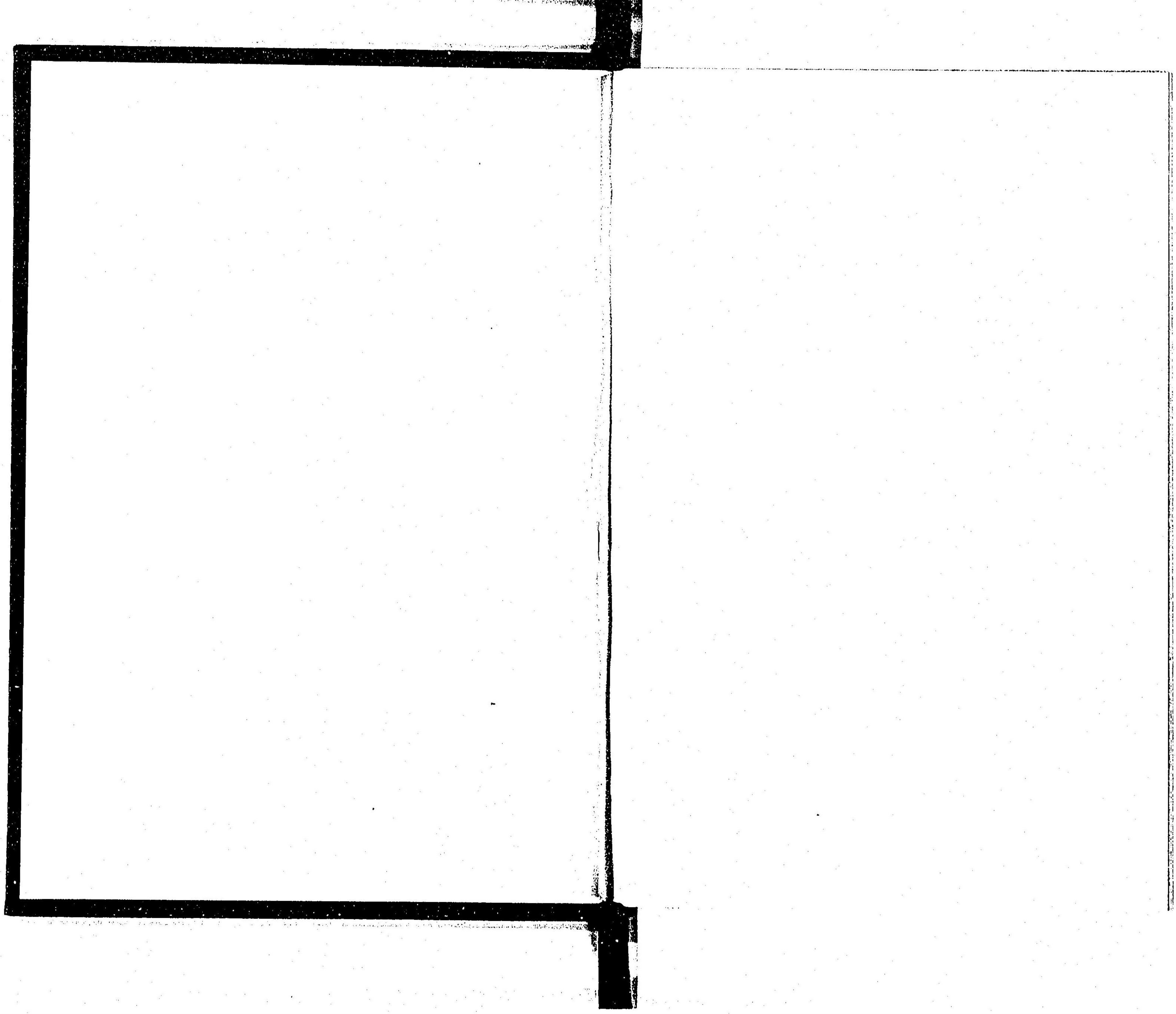
卅八年度 太平洋畫會畫集 (新刊) 金六十錢 郵稅四錢

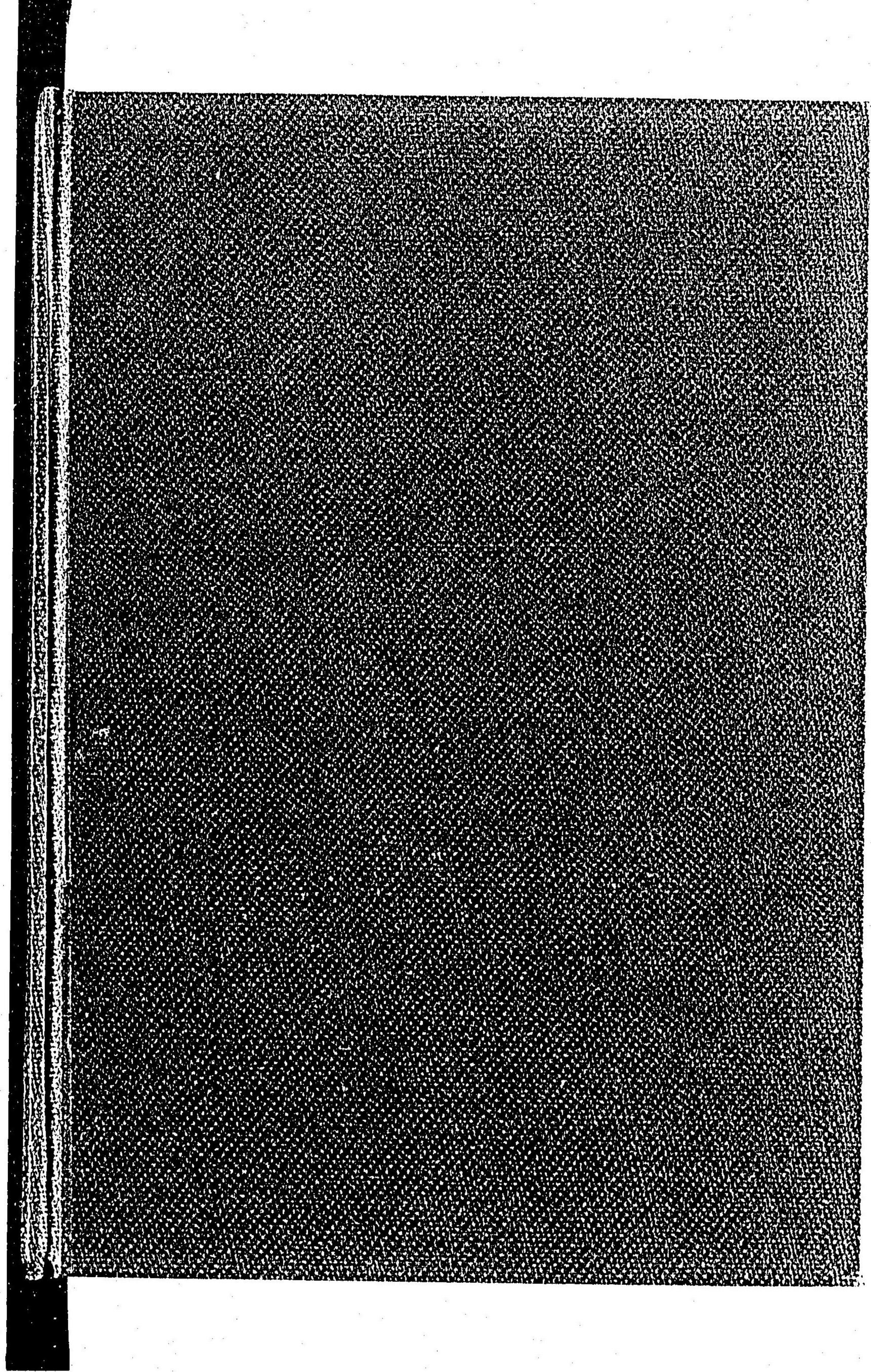
小林萬吾 風景水彩畫帖 (木版) 近刊

同 人物水彩畫帖 (木版) 近刊

中澤弘光 富士十貳景 (再版) 近刊

諸大家 明星畫譜 (再版) 近刊





98

185

013759-000-6

98-185

病間録

網島 梁川/著

M38

ABA-0248

